

◇ 講演 ◇

## 視野をひろげて

— 教育の貧寒化を憂える —



周 郷 博

自然とともに

私は 幼稚園長を四月一日にやめて……エープリルフールで  
す……、そして、二カ月ばかりたって、多少落着いてきました。  
というのは、覚悟ができてきたっていうことなんです。それに  
したがって、今住んでる家のまわりの自然が、みどりになって  
きますからね、ぼくとしては、忙しくなってくるんです。一言  
でいうと、ぼくはこのごろ、畠きちがいになりました。

けさも、五時ごろに目が覚めたら、かっこうが鳴いてました。  
だから戸を開けて、ねまきのままで畠仕事をしました。少し寒  
いくらいでしたが……。とにかくこういうことは、自分の手で

やらなくちゃだめです。手でさわると、土はあたたかくて、ち  
よっとしめりつけがあるんです。一月くらい前に、堆肥をかき  
まぜるのをやりました。山の枯葉をとってきて（これなかなか  
大変なんです）菜種油の油粕をまぜて、よく指先でまぜます。  
きたない、なんていつてちゃだめです。ぼくもずいぶん爪がき  
たくなりました。彫刻するみたいに地面をひっかきますから  
……。

で、草刈りもやります。かっこうが鳴いたといいましたが、  
四、五日前はほととぎすも鳴いていました。今、山はほった  
かします。くずのつるっていうのは木にからんじゃいますね。  
木が苦しそうで、ぼくはそれをとってやるんです。一人でこん

なことをやってると、ぼく、何をやってるのかな、と思うし、人もまた何と思うでしょう。ぼく自身も、ぼくはついに妖精になっちゃったのかな、なんて思います。この間も、草を刈りながら、お前たちは道に生えるのならいいけれど、木からんじやいけないよって引っぱって、ステーンところんじやつたりしました。でもぼくは何となく楽しいんです。そうしてやらなきゃ木は枯れちゃいます。こんなことをやってると疲れたことを忘れて働いてしまいます。自然とか、大地とかいうものは、それだけ人をひきつける力があるんだなあ、と思います。

ですから、くたびれるくせに健康、少なくとも精神的に健康だと思えます。栄養なんかそんなにとらなくても、やるべきことを一生懸命やってる方が健康です。

こういうふうにはぼくは、百姓きちがいみたいになって、作物を育てること、自然、地力を回復するために働いています。そして、ぼくは幼稚園長はやめたけれど、せまい地域といえども、この日本の大自然の園長であると思います。人間のつちあげたものなんかではない、園丁、そう、堂々たる幼稚園の園長です。

こういうことからすぐに幼児教育の問題にもっていきたくはないんですけど、やはり地力がだめになったようなものが、

日本の教育界にあるように思います。化学肥料を入れて、農業なんかを使った、何か粘りのない、軽くなっちゃった、大地の地力に相当するようなものが、どんどんぬけおちちゃっているような気がします。教育というものは、地力がなくなればなくなるほど、カラカラに乾いています。何かいろいろと理くつをつけて飾りたてている、そんなことをやってるような気がします。

### 環境としての自然

ぼくは前に、脳のどこが、どんな働きをしているかについてのを本で読みました。言語、思考の中枢は左にありますから、右手と関係があるわけです。ことに人間は肺が左の方によつてますから、右手の方が使いやすいわけです。ぼくの母は左ききでしたが、脳の右の方は片輪にならない、バランスをとる働きをするんだそうです。いずれにしても、手を使わないと、言語も、見るという世界も、自分のものとして本当につかんでいるということにはならないと思います。

これは、幼稚園をやめるころから考えてたことなんですけれど、人間の中枢神経っていうのは、他の動物より長くできていて、背ずいを通して手足の尖端までいっています。ですから、

手足は使わなければだめなんです。足だって移動させなければいけません。高い所へ上るのにも自分の足を使えば大きな展望ができます。だんだんと視野がひらけてくるといふ驚きもあります。こういうとをやらずにいると、頭がいいといつても、言語を覚えたといつても、その言葉がうわずつていて、やたらにしゃべるというか、やたらに考えているみたいだけれど、本当に大事なことを考えているわけじゃないんです。

こういうことばかりしていると、人間の神経の働きがまさに伸びがないという状態がおこつてきていると思います。モンテッソーリは感覚教育、といいましたが、しかし感覚というのも、受身だけでなく、自分で本当にやって見なければ、自分の感覚を自分で調整して作り上げたいことにはならないでしょう？ やはり基本的な人間は、自分で自分を作り上げていくものです。畠の作物だってそうです。自分で自分を作り上げようとしているわけです。それに関して、ぼくがこういうことがやれて、その物の成長のプロセスにどういう環境を作つてやることができたか、ということが基本だと思ひます。

その環境つていうのは、ふつうは物質的な環境みに、狭いもののように思われています。しかし、環境というと社会もむろんあります。家庭、社会の人々の仕事、表情などもありま

す。そういうものの全体を支えているのは結局、自然なんじゃないかなと思います。

三十年もフランスにいて、十六年ころ前に日本へ帰つてきた高田博厚さんという彫刻家がテレビでいいました。『ヨーロッパの自然は感情をもっている』と。ヨーロッパ人の思想、イメージ、行動、価値観の根になっているんです。われわれはそれを忘れていると思います。そういうものを切っちゃつて、幼稚園のカリキュラムの中で、感情をどう育てるか、なんていつたつてだめです。自然が感情と思想をもっているという大胆ない方、ヨーロッパではまさにピタリなんです。

ヨーロッパの自然には音楽がある、とぼくは前にもいいました。雲の動き、草原のひろがり、自然自体のひろがり、深い青空まで含めて、それ自体音楽です。ああいう自然があつたから、ベートーベンやバッハのような人もイギリスへ行つたヘンデルのような人もあいう曲を作つたんです。あの自然を全部破壊していたらこの人たちも出てこなかったでしょう。自然が思想、感情をもっている。ぼくたちはそれを忘れてるんじゃないでしょう。何か人がでつち上げた環境、よごされた食物、特売品、ぜいたくな家具、そんなものを環境だと思つてゐる。もつと悪くいえば、金があれば子どもはよくするように思つていま



ヨーロッパの自然

すが、これは全く今、逆です。金がない方が子どもはいいんです。

自然の美しさ、風景というものがわれわれの心を作っている、それをこわしてしまえば心のよりどころがないわけです。これも一つの重要な問題です。六月五日は世界環境デーです。まさに人類全体が幸福の問題を考えなきゃいけないと思います。自然とたち切られた箱のような家の中に入って、見せかけだけの食物を食べて、生きている生命が育つはずはありませんね。

高田さんは、「感動、本当に感動する」とさびしいんですよ」といいましたが、本当にそうだと思います。今の日本じゃそんなこと、ないんです。感動するとうれしい、うれしいなんていうのは感動じゃないんです、甘たれて……。本当に感動するときはさびしい、そこまで今の日本人は行けないんじゃないか、と思います。芸術作品にしても、音楽でも、また自然というものは何て大きくてふしぎだろう、と思えば、星空をただ、「きれいな」なんて見てる、そんなのです。本当に感動したら、この無限の天空の下にぼくが一人生きてる、さびしいはずじゃない？ しかしさびしいって世間でいうのと少しちがいます。自分の小ささ、それを認めて、その小ささ、無力さもちたえていかなきゃいけない、そして大きなものとの関係がどうし

たらつくだろうか、そう考えたら本当の感動はさびしいはずであって、それなしでは成長も起動力もおこってこないのです。

こじば

興味、好奇心、関心、これみんなほん訳語ですが、いったいこれは何でしょう？ 教育の世界では、特に教育の世界ばかりでなく、言葉じりだけで、はやっていることを言葉だけで覚えて、何かわかったふりをするのが日本人の性格で、また戦後の風潮ですね。しかし言葉は実体をもっているんです、いるべきものです。

きょう丸善で至光社の武市さんと話しましたが、武市さんは、親切という言葉についてこういいました。ばくも前から親切っていうことはただベタベタすることじゃないかと思っていました。ところが武市さんは、親切の「切」は「切らなきや」いけない（切だ）っていうんです。ところが今の親切は、切らないで接するという「接」という字を書くんじゃないかっていいました。接客業のようにただくっつくんです。親しさを切るというのが本当の親切なんです。切るというのはさびしいけれど（「親しみ」の「切なるもの」か）、やはり人はその人自身にしてあげなきゃいけないわけです。死ぬ時はだれでも一人で死ぬのです。

だから人生は切らなきやいけないことがたくさんあります。にもかかわらず、人間として親しさというものがなければ生きられません。親しさもただ人からうけるだけでなく、人に對しても表わさなければなりません。それが親切です。

日本人は言葉をいろいろと変に使ってしまいましたね。特に週刊誌などで……。言葉は使う人によってこわされちゃうわけです。よごれた心をもった人が手段として使えば、言葉は死んでしまいます。変色、変質してしまいます。言葉の実体まで変わっちゃっています。さっきの「親切」の実体もないんです、ベタついて、かんぐっていえば、親切にしているみたいだけれど腹はちがう、本当に無邪気な、親切な、人と人とのつながりを見いだすことは少なくなりました。

ちよっと思ひ出しましたが、このごろの高校生に「恋愛」という字を書かせると上は野蠻の「蛮」、下が虫になっちゃって、「愛」という字は心をとってしまっ受けるという字、「蛮受」になるそうです。恋愛というのはやばんなもの、行為をうける、そういう字になって、何か実体までそういうふうになってしまいました。本当の恋愛がなくなってきたんです。だから「蛮受」だったんだから、結婚して子どもができる。その「蛮受」の仕返しに子どもを殺してもいいということになるのかもしれない。

## ヒステリー・ノイローゼ

齊藤茂太さんがいつか、日本の人口の60%は今やヒステリーで、やっともたしているが本当はヒステリーだと本に書いたりテレビでいったりしてました。いつそれが出てくるかもわからない、あの人はいい人だ、なんて思っても安心できないそうです。ところが昨日のテレビでは、日本人のほとんど全部がそうだとっていました。自分のことで頭の中がいっぱいで、人のことなんか考えるところができない、これがノイローゼの徴候だそうです。ぼくのように蟲をやつてごらんさい。ノイローゼにはなりません。夜寝ても、肥料のこととか、あの川のそばの草を刈つて、マーガレットを植えてとか考えます。朝ちよつと起きてもお天気が気になったり、忙しくてしょうがないんです。ヨーロッパへ行ってみると、経済成長よりも農業を大切にしようというふうに変わつてきています。時間をかけて育ていくものを大切にしようという思想です。ぼくは山を掃除してると、冬でも汗をビッシヨリかきます。人間は汗かかないといけないんじゃない？ 皆さんも汗、かきますか？ 汗は体の調整作用ですから、汗をかくとあとがさっぱりするわけです。体の中のだまっているものが出てくるわけです。はじめはネバネバ

した汗が出て、それでやめちゃいけません。もう少しするとサラッとした汗が出てくる、そこまできなくちゃだめです。

ずっと前にきいた話ですが、小学生が遠足に行くと、年たった校長先生はサッサと歩いて、チビのくせに「つかれた」っていうんだって。汗なんか出てないのに疲れたっていつてアイスクリームなんか食べるんだそうです。

## 環境汚染

ジャーナリストイックな言葉でいたくはないのですが、第三水俣病とか、第四、第五もあるだろうっていわれると、ああそうかなと思います。熊本の水俣病は急性で非常にひどいものですが、今や日本中の海はみんな危険になっちゃったのです。急性の水俣病はひどくなくても、中枢の神経がおかされていると思います。

もう一つ大切なことは、今の日本は世の中がどんどん変わって刺激ばかり多いわけです。すると他の動物よりは長く、弾力性のある人間の神経もおかされてしまいます。こう刺激が多くて、変なことを覚えさせられたりしてるんですから、水俣病のような傷害のほかに、協力なんていうことも、協力という名前ですら中味はきれぎれであつたり、断片的な刺激的コマ

ーシャルがはらんしたりすると、大人はまだいいとして、小さい子どもの神経はブツブツに切れて伸びるどころじゃなくなってしまう。一方で、PCBとか有機水銀とかが緩慢な状態でも入ってきます。すると、形は人間らしいかっこうをしてても、中の神経は方々切れている、ということを考えてもらなさい。今は立ってます、しかしある日パソコンと倒れちゃう、人間はある程度他の動物より図々しいというか適応性がありますが、中味はボロボロ、ボロボロとまでいかなくても神経に伸びがないから根気が続かない、ちちんで切れ切れなんです。ぼくは、こういう状態が、われわれがいまおかれている環境だと思えます。

イギリスのアイゼンクという人がいたり本に書いていたりしますが、心理学は間違ったことをしている、少なくとも悪用されているといっています。そして百年前の日本は、多分非常に今とちがって人間もよかったんじゃないかともいっています。戦争に負けてから毎日どんどん今まで知りもしなかったアメリカあたりの技術なんかをとり入れて、日本人は神経さく乱状態になったんじゃないかと思えます。戦後の日本は、あまりに刺激が多く変わり方が激しくて、中から何かができてくるひまがないんだと思います。

先だって日本に季節感がなくなったという話を人もしましたが、実際の気象も変わっています。ヨーロッパも変わっています。去年の六月、パリで汽車をおりましたら迎えにきてくれた人が、「冬だよ」っていつてオーバーを着ていました。こういうふうには、世界中が変わっていますが、日本は局地的に、世界のエネルギー消費量の平均の七十倍も使っていると、この間竹内均さんが発表していました。こんなことでいいんでしょうか。

水なんかだって危険だと思えます。都市にこれだけの人口が集まって、水洗便所とか、電気洗濯機とかで水を大量に使って、その上洗剤を使って泡を海に流しています。そして集中豪雨、農業の問題もあります。日本は、世界中で一番きれいな水がのめた国なんです。日本は高低のある土地で、森林の間を流していつもきれいな水が流れてきました。地下水もいっぱいあります。今はばくの家の方なんかでも、工場が地下水をすい上げるもんだから、田や畠もようすが変わってきました。地下水も目に見えないけれど、大地の中の重要な部分なんです。水と、空気と、安全は、いつでも手に入るなんて日本人は思っていますけれど、水、まさに危険です。

今も朝、顔を洗う時、水道をちょっとひねりますね。すると

きれいな水がジャージと流れてきます。きれいですよ、丹沢から流れてくるんですから……。何とぜいたくなんでしょう。山の中にいるかの如くに、ちよつとひねつただけできれいな水が出てくるんです。これ、感謝していいことじゃない？ 顔を洗ったきたない水を流しますね、これはこの先どこへ行くのかな、地面に吸いこまれてその先どうするのかとぼくは考えます。これがまた、きれいな水になってわき出してくるのならいいけれど、その循環がなくなったら、ついに水はだめになります。ぼくはこれだけ水をよごしてしまった、と考えますけれど、水を今皆は平気で使ってますね。洗濯機なんて少しやめにしたらどうでしょう。電気だってあまり使わない方がいいと思います。早く洗濯ができればいいんじゃないかと、そのために自然の一部を汚染しているわけです。

### 氏より育ち

人間はそれぞれ個性的な種をもって、長い種の連続として男女の間に生まれてきます。遺伝子を通じて、長い進化の歴史を伝えて一人の人間が生まれてくるわけです。これを「氏」とよんでいいでしょう。しかし「育ち」、環境がだめなら、いくら種がよくてもだめです。しかも作物でいえば、ボサッと、ゴチ

ヤゴチャ生えているとだめなんです。この環境は、ますます、不自然に作られたような自然はありますが、本当に自然とよべるような自然の環境がなくなってきました。自然は生きていて、その自然と関係をつけるということが「関心」です。この言葉の語源は「間にある」ということです。前に行ったように、感情や思想をもっている自然の中で、遊んでもいい、労働してもいい、と思います。そういうアクティブな、（自然を楽しむ、楽しませてもらう観光じゃないんです）姿で関係をもたなければいけないと思います。エーリッヒ・フロムの言葉なんかによると、そういうことによって、内臓の中に思想や感情の根がはるわけです。その根が現在では全部きられている状態です。年をつてる人はいくら根をもっていますが、もう私は死をまつただけだなんていって……年とつてる人もつと遠慮しないではいいと思います。

### 木目と年輪

ぼくは今、戦後二十八年たったというのに、何か長く生きてきたという気がしません。戦前の十年十五年の方がはるかに長い道のりを上ってきたなという感じがあるわけです。戦後はいろいろ、刺激的な瞬間はありましたが、雑然とごみのように



たったただけで二十八年生きてきたっていう感じがしないでしょ。小さな子どもたちも、自然から切りはなされ、まわりにたえず表面的には興味をひくようなもの（知識というものもそのたぐい）ばかりあります。すると、大人はまだもことがあるからいいですが、子どもにとっては、ただ時計が動いただけです。

昨日の新聞に、栃木県の方の神社で、樹齢七百年のけやきの木を売ったという話が出ていました。それを材木にするのに割って見たら、きれいな木目が出ていたそうですが、今の子どもは年輪も木目もないんじゃないでしょうか、年輪とか木目にあたるものが、人間にもあるべきです。これは外からは見えませんね。人間も同じです。その人が生まれてから生きてきた、辛い時、不幸の時、うれしい時もあつた。それが外から見えない木目になってその人、人にあるわけです。そしてそれがシユバイツァーであつたり、バートランド・ラッセルであつたり、人類の中にあるわけです。日本の現状では、子どもにそういうものができないような気がします。長い先のことはわかりませんが……。

そういう意味では、それぞれ個性があつて、外から見えないけれど年輪もあつて、それぞれ一緒にいるのが楽しい、という

のでなく、同じようなつまりロボットが（ロボットは死んでいくからまだいいけれど、生きているんですよ）何人もいたら、始終自分を目立たせようという気が（アセリが）あるわけです。ちがつた個性だからこそ、一緒にいておもしろいんです。先生の方もそういうことを考えてるでしょうか。

### 物との関係

ばくが幼稚園長になって二年目くらいの時に、イザヤ・ベンダサンの「日本教について」という文章が雑誌にのりましたが、それが非常に印象に残っているのでこのごろまた読み返しています。そのはじめに、

「日本人は物との関係ではノイローゼにならない。が、人との関係ではすぐにノイローゼになる」とあります。

これは全く、日本人のいけない点だと思います。人との関係ばかり気にして、物との関係、たとえば学生なんか、黒板がいくらよれていても平気です。ヨーロッパでは、物は、人間も含めて自然の一部であるという考えがあります。高田さんがそういつてましたが、彫刻なんというのはまさに物との関係です。数学もそうです、物との関係で考えればおもしろくてやめられなくなります。成績なんていう人との関係が入ってくるのでい

やになるんです。自然科学も、労働だって、人間と自然との関係をつけることです。ところが、お金という人との関係が入ってくるとちがってきます。食物なんかも、物との関係を考えたら料理はもっと素朴であるべきです。人との関係を気にして高いお金を出してまずい料理を食べに行くことはありません。

消費文化の上ののっかって、受身の態度で大きな機械から作られたものを、消費するのが人との関係をよくする、と考えているんです。もっと、物との関係を、清潔で、味わい深いものに、エレガントにする必要があります。そうすれば自然科学の本を読まなくても自然科学者に近くなります。ぼくは今年はやえん豆をまく時期がおくれたために失敗しましたが、昨日やおやの前を通ったら、ひからびたやえん豆がならんでいました。あんなものを売る方もですが買う方も買う方だと思いました。野菜に対して気の毒だと思わなければいけません。もう少し物との関係でノイローゼになったらいいと思います。

物の背後には大自然があります。生命っていうのは大地に根をはって、爆発力をもっているものです。これは虫のつき工合をみてもわかります、いきおいの悪い芽には早く虫がつきます。たまに逆もあるけれど……。あるところまで育つと、例をとるもろこしにとると、四月にまいて八月に収穫するわけですが、

六月ごろになると、あ、きまったな、と思うわけです、そのころになってだめなものだめです。あんな弱々しかった芽が伸びて堂々としてきます。「かけがえのない地球」という本の中に植物の光合成のことが、石油コンビナートなんかよりずっと複雑な現象だと書いてありますが、そのもっとも総合されたものが、この植物の光合成、私のいう「爆発力」だと思います。

## 仕上げ

さて仕上げをするわけですが、仕上げということは、人生においても、人生のある部分についても、あるわけだとこのごろ考えています。そして、仕上げはその人の主体性によって一つの区切りをつける、その人でなければできないという仕上げが必要です。先生は先生で仕上げをしなければいけないし、子どもも六歳になった、というところで仕上げをしなければいけないんです。しかも高田さんがいったように、永遠に未完成な仕上げです。自分がここに生きていたという意味では、たえず仕上げをやらなければいけない。あのことも知った、このことも知った、ということよりこの二つのつながりは何だろうと考えることを、自分でやらなきゃいけないんです。感情、頭、手、足がバラバラに生きていても「これが私です」というものを、

たとえ足りない部分があっても作っていくべきです。いろいろなことをいってききましたが、これから私も仕上げをしなければならぬわけです。

関心とか、興味というものは、大人になればなるほど実利にくっついてきます。しかし子どもにはそんなことは必要ないのです。ここで、つりあいのとれた人間らしい生き物として育っていく根や幹がちゃんとでき上がる、というような関心と好奇心を育てなければいけません。この好奇心というのも、日本人のいわゆる好奇心ではないんです。自分のまわりの自然、星空といった大きなものと自分を関係づける。そして行動にならないければいけないんです。しかし子どもをとりまく現在の環境は、雑然たる刺激の中で甘やかされ、接するというベッタリの「親接」ばかり、その上に大抵のお母さんやお父さんまでもがヒステリーです。食品も危険で神経にはのびがなく、手足を使った行動のすがすがしいあと味もない。昔だと、ずーっと山の向方までぼた餅をもって山こえてお使いに行ってきた、というような、やるべきことをやったという満足がないんです。いつもいいかげんなものしかみだされていない、根気のない人間ができつつあります。

もっと自然との関係をつけるべきです。芽を出して、育って

花が咲き実がなつて死んでいくということは人間も植物と同じだ、というあきらめのような、全体を通して自分を位置づける、そういう意味で、農業をもっとみんながやりたいと思います。大人たちがどう考えて、どういう仕事をしているかということが子どもを教育するわけですから、まず大人がもっと自然と関係をつけたらいいと思います。ここでみんなが覚悟してちょっとでも変わってこない、と、教育はともひどいところへいってしまおうと思います。目的をもって能動的に生きていけば、日本人の顔つきももっとよくなります。その目的も、観念でなく、行動しなければいけない。教育は文部省がやってくれるなんて思わないで行動しなければいけないんです。

それで、母親というのは大事です。ハン・スーインの書いたもの「毛沢東 The Morning Deluge」(松岡洋子編訳)の中で毛沢東もいっています。父親は人生の競争相手、かつ導き手だが母親はもっと人生の基本的なものを与えてくれた。そういう女性、母親が見られなくなったと思います。母性的なものが非常に失われてきました。そういう意味でばくは、女をちやほやもち上げる意味でなくて女性を大切にしなければいけないと思います。しかしやたらにお化粧ばかりして男をだまそうなどという女ばかりだったら、男性もだ落してしまいます。むず

かしいことです。

物との世界と関係づける。一つの仕事をさばることもそれだけ他の人が困るんだという精神をもてば、その人の精神的なエネルギーは、物質的エネルギーに転化する、物を動かす力になるとハン・スーインの本の中に毛沢東のことばとして出てきます。どこかからのかり物のようなお説教ではないんです。

さつき武市さんたちとも話したことです、感情が不安定なためにそのよりどころとなるような宗教みたいな、われわれの存在の基本になるもの、がほしいわけです。それで絵本……これなんか世界共通なものですね、それが非常に売れているということは、絵本の中に宗教的なものを求めているんじゃないか、価値観、感情、行動の乱雑さのおさまる場所を子どもの絵本の中に求めているんじゃないか、一種の宗教だといっていました。絵本は世界共通です。子どものものでも年とった人でも読みます。ここに何か人類共通のつながりを求めているのではないでしょう。ある神父さんが「今大切なのは信仰よりも「関心だ」といっていることをフロムの本の中で読みましたが、それを（関心ということ）をもっと大きくいえば、宇宙と人間の関係だと思います。生きてきた過去、現在の環境です。そしてわれわれが死ぬ時に子孫に何を残すことができるだろうかという

ことです。中国の繆承志さんたちはよく「子々孫々まで」といいますが、われわれに子々孫々まで残すといえることがあるでしょう。本当にきれいな水と土地と自然と、よい教育を残すっていうことが今のままではできません。これは今の大人たちの責任です。

「信仰」よりも「関心」、まわりにおこっけてくるいろいろなことにどういう関心（感じ考え行動する心）をもって責任をとるか、ということが大切なのです。そういうことで、フロムの最近の本の中で一番印象に残っているのは、「神に救ってもらうというよりも神の心を行なう」ということばです。これを「信仰」にかえたらいいと思います。神様が今この世にいらしたら、これじゃいけないと思うはず。神の心を行なわなければいけないんです。そうすればそこで自分の無力もわかってくるんです。信仰しているから救われるというのじゃなく、救われなくても神の心を行なえばいいんです。そして七〇〇年の年輪や木目のようなものが中にできていたというような子ども、人間を育てていきたいと思えます。そうすればもう死んでもいいと思います。

（一九七三・六・二）